

法、原文及び解説を載せるがそれは單なる字句の註釋に止らず、史的意義にまでも及ぶものである。印刷鮮明にして解説懇篤、美國に收められて、京大國史研究室の出版たるにふさはしい。(玻璃版菊四倍版六十七葉、解説四六倍版六十六頁、定價拾八圓、星野書店) (藤)

●滋賀縣史蹟調査報告 第五冊

本報告の執筆者肥後和男氏は嘗て専ら滋賀縣に於ける史蹟調査に従事し、同縣史蹟の最たる大津宮趾、紫香樂宮趾を闡明し、その結果を大津宮趾の研究及び紫香樂宮趾の研究なる二報告書として之を學界に送つたことがある。氏の史蹟調査に於ける態度ほかの二報告書に明かに見らるゝ如く、遺物の報告を出来るだけ精密ならしめんとすることゝ、またその上に惜しみなく意見を開陳しようとするにある。故に氏の手による調査報告書は一面精しき報告であると同時に、一面常に一つの主張をもち、宛然一個の論文たる如き形をとらんとする。本報告書はまたこの氏の史蹟調査に於ける方向を氏の長ずる寺院遺蹟の調査に於て顯示せんとするのである。各項いづれも氏が専ら調査に當つて居た時に觸れられた結果を集めたものである。

本報告書の目次は、次の如くである。

崇福寺に關する延暦僧錄の記事

錦織平尾山に於ける平安時代の墳墓

石山町近江國分寺

瀬田諸廢寺趾
石居廢寺趾

飯道山(飯道寺趾)

勝樂寺

京極氏歷代墳墓

北畠具行卿の墓

各項共に報告たる性質に於てみるべきものあるは云ふまでもないが、この内特に注意すべきは、延暦僧錄の記事、飯道山、京極氏墳墓の三條項であらう。即ち延暦僧錄の記事に於ては崇福寺に關する問題が取り上げられ、日本高僧傳要文抄の延暦僧錄第二の文を紹介し、論ずるところは之が延暦の故文の抄略であり、從つて崇福寺の緣起の最古のものとすべきであり、之によつて崇福寺創立當時の伽藍配置を知り得るといふのである。而して所謂崇福寺當初の伽藍配置とは金堂(彌勒堂)の東には講堂があり、金堂の南方には欄あつて、こゝに二行の橋廊を架しそれを渡つて南方に殿が相對してゐたのである。この配置を著者は、著者の嘗て以て崇福寺遺趾と比定した滋賀山中の礎石配置に吻合するものとし、之によつて著者の大津宮趾の研究正續二篇に於て公けにした意見か更に補ひ且つ強めようとする。

本項の如きは嘗て著者によつて學界に投げられた大津宮趾の問題が大きかつただけに、單に一報告と見過さるべきでない。

飯道山の項に於ては、飯道寺遺趾の報告があることは特に云ふまでもないとしても、注意すべきは飯道山にまつばる傳説の

解釋にまで思ひを及ぼしてゐることである。即ち或ひは飯道山に天童降臨の傳へあることに於いて、日本神話の天孫降臨談の一具體相を見得るとなし、或ひは傳説に出てくる神々を神話解釋學的に解剖し、更に寺に傳はつてゐた笈渡しの儀にまで言及してゐる。之等の紹介及び解釋は從來の史蹟調査報告の態度よりすれば、一步埒外に出たものともされるかも知れないけれども、併し乍ら更に考へれば、忠實になさるゝ限りはこの方面の調査報告は物的資料の忠實な報告の自然なる延長また擴大として來るべきものであり、また、來らざるべきものであらう。

京極氏歴代墳墓の項に於て報告せられてゐるものは柏原村徳源院にある京極氏各世代の墓である。此の墓は鎌倉以後徳川に到る各時代の寶篋印塔を一場に見得るが故に、夙くより注目されてゐたものであるから、この報告はその意味に於て先づ豊富なる資料の提供といへる。而して、之に對する考察に於ては、歴史事實上の考證は遠陽黒田惟信氏の嘗て著した京極家墳墓考を請うて之を載せ、形式上の考證は、肥後氏自ら之を施してゐる。黒田氏の論はこゝでは主として、墓の主とその卒年月との考證に向けられてゐるけれども、しかもその事たるや正しき京極家系圖のない事情にあつては、地味にしてもしかも極めて勞多きアルバイトである。文中或ひは一二墳墓の形式に合はないものを墓主に擬することあるとしても、京極家歴代の考證に於ては極めて堅實であり、宛然一部の京極氏興亡史をなすものと稱するに足る。

本書を讀了して感ずるところは先にも云ふ如き調査報告に於ける肥後氏の二つの態度である。毎條項に實測圖を數多く挿入せる如きは、その一なる報告を可及的忠實ならしめようとする態度より出る。飯道山に關して神話解釋學的、民俗學的資料の紹介及び論説、京極家墳墓に關して京極家墳墓考の合載等はその一なる史家の考察を入れようとする態度より出る。この態度は或ひは異見を抱かるゝことありとするも、史蹟調査報告に於て正しく存在理由をもつてあらう。

更に感ずるところは黒田惟信氏に於ける基督教精神と國史研究との融合である。即ち氏には先に東淺井郡史の著實なる編著があり、また別に京極家關係文書を悉く手寫して纏められたと聞く。而して現在は横須賀に於て基督教を傳道しつゝあり、近くは三位一體論なる冊子を出してゐる。このことは現在の基督教界と照し合せて眺むるならば日本の歴史を没却した所謂舶來基督教から、眞實の意味に於て日本の精神を呼吸する底の基督教に動きつゝあることを感じさせるのである。(四六倍版本文一六九頁圖版二七頁、非賣品)〔柏倉〕